Economic Indicators

発表日:2022 年 9 月 8 日(木)

景気ウォッチャー調査(2022 年 8 月)

～現状判断、先行き判断ともに DI 改善も、持ち直しペースは緩慢～

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 大柴 千智(TEL:03-5221-4525)

		景気の現状判断(方向性)(季節調整値)合計	家計動向関連	企業動向関連	雇用関連	景気の先行き判断(方向性)(季節調整値)合計	家計動向関連	企業動向関連	雇用関連
2021年	8	34.9	31.0	41.5	46.6	43.5	42.9	45.6	43.2
	9	42.3	40.8	43.4	49.4	56.6	57.3	53.6	58.7
	10	55.1	56.0	51.2	57.5	56.6	57.2	52.8	61.3
	11	56.8	57.2	54.5	59.0	53.2	53.5	50.4	58.0
	12	57.5	58.5	53.3	59.9	50.3	49.8	49.0	56.3
2022年	1	37.9	34.5	43.8	48.2	42.5	41.0	45.1	47.1
	2	37.7	33.7	43.1	52.1	44.4	44.3	42.9	48.1
	3	47.8	46.8	45.5	59.5	50.1	50.9	45.1	55.3
	4	50.4	49.6	47.4	62.6	50.3	50.0	48.2	56.3
	5	54.0	53.8	50.4	62.9	52.5	52.2	50.6	58.9
	6	52.9	53.4	48.0	59.6	47.6	48.0	42.8	55.2
	7	43.8	42.6	44.3	50.7	42.8	41.6	43.8	48.3
	8	45.5	43.8	47.5	52.5	49.4	49.6	47.3	52.2

(出所)内閣府「景気ウォッチャー調査」

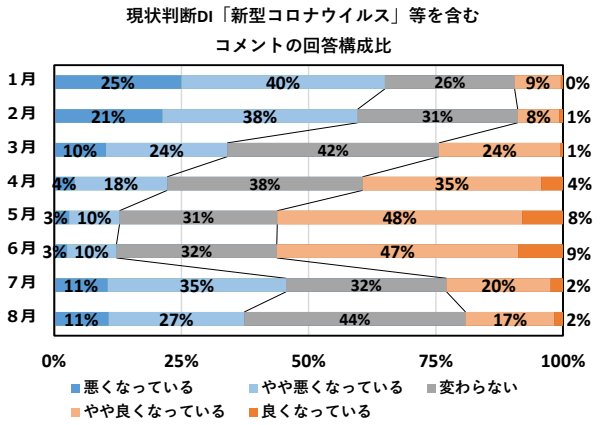
○現状判断 DI、先行き判断 DI ともに前月から改善

内閣府から発表された 8 月の景気ウォッチャー調査（季節調整値）（調査期間：8 月 25 日～月末）は、現状判断 DI が前月差＋1.7pt 上昇し 45.5pt、先行き判断 DI は同＋6.6pt 上昇し 49.4pt となった。現状判断、先行き判断ともに前月から改善したものの、景況感の良し悪しの分かれ目である 50 を下回る状態が続いており、持ち直しペースは緩慢だ。政府による行動制限がとられなかったこともあり、すでにコロナによる悪影響は緩和しはじめていることが窺える一方で、物価上昇が景気回復の足かせとなり、景気の低迷状態が継続している。

○現状：持ち直しのペースは緩慢

現状判断 DI（季節調整値）は、前月から＋1.7pt 上昇し 45.5pt となった。内訳をみると、家計動向関連 DI が前月差＋1.2pt、企業動向関連 DI が同＋3.2pt、雇用関連 DI が同＋1.8pt とすべての DI で上昇した。8 月は改善がみられたものの、景況感の良し悪しの分かれ目である 50 を下回る推移が続いている。7 月以降の国内感染急拡大の影響が残存していることや、資源高を背景にした物価上昇の悪影響を受け、持ち直しのペースは緩慢だ。

「新型コロナウイルス」に言及するコメント数を



集計してみると、コメントの回答構成比では「悪くなっている・やや悪くなっている」が占める割合が前月から減少しており、今月の現状判断 DI の改善に繋がったことがわかる。一方で、「良くなっている・やや良くなっている」が占める割合についても前月から減少しており、景況感が改善したとは評価できない点に注意が必要だ。

今回の感染拡大局面では、政府の行動制限が取られなかった点が特徴的だ。この点に関して一定数の前向きな評価もみられるものの、全体では慎重な意見が多数派のようであり、寄せられたコメントからは、自主的な外出自粛やマインドの冷え込みで景気の低迷状態が続いている様子が窺えた。「８月は売上の最盛期であるはずが、新型コロナウイルスの感染拡大により来客数が再び下降傾向にある。政府の行動規制等がなかった分、お盆の催事や週末の行楽客などの来店はあるものの、メイン客層のオフィスワーカー等の来店が少なかったことにより、平日の来客数が減少している（コンビニ）」といった意見や、「新型コロナウイルスの新規感染者数増加に伴い急激に来客数が減少し、予約のキャンセル等が増加している。しかし、今までの新規感染者数増加時とは違い、利用客や行動する方が以前よりも多くいるため、極端に落ち込むことはなかった。ただし、団体や法人関係の利用はほぼ消失したので、結果的には悪化傾向にある（都市型ホテル）」といった意見が代表的だ。

また、原材料をはじめとした商品価格上昇の悪影響も、家計動向関連、企業動向関連ともに多く言及されている。「受注量は堅調に推移しているが、資材が高騰する一方で販売価格を十分に上げることができず、利益率を悪化させている（一般機械器具製造業）」といったように、十分な景気回復が実現しない中で価格転嫁が困難な状況を指摘する意見がみられた。

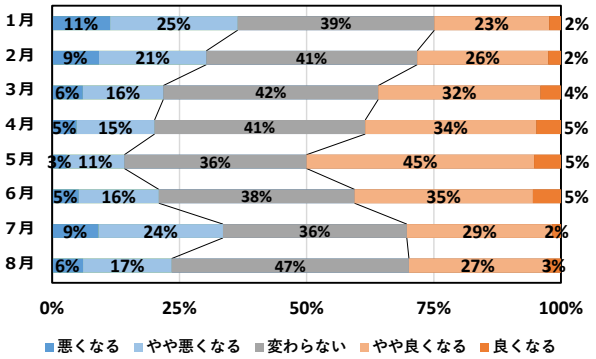
○先行き：感染収束後も、物価上昇による悪影響への懸念が根強い

先行き判断 DI（季節調整値）は、前月から＋6.6pt 上昇して 49.4pt となり、2 カ月ぶりの上昇となった。内訳をみると、家計動向関連DIが前月差＋8.0pt、企業動向関連 DI が同＋3.5pt、雇用関連 DI が＋3.9pt となった。

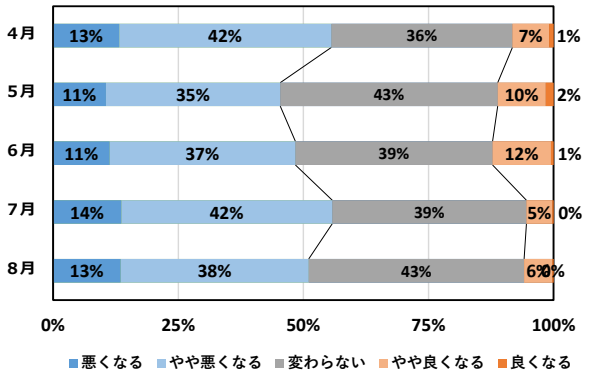
「新型コロナウイルス」に言及するコメント数を集計すると、コメントの回答構成比では「悪くなる・やや悪くなる」が占める割合が減少しており、先行き判断DIの改善に繋がったことがわかる。寄せられたコメントを見てみると、感染拡大の影響は徐々に収束に向かうとみる意見が多く、「全国旅行支援が始まれば今よりも申込みが増えそうであり、問合せも増えてきている。海外からの帰国前検査などの水際対策も緩和されれば、海外旅行も徐々に復活すると予想される（旅行代理店）」といったように、観光需要の回復を中心に、感染収束に比例して徐々に景気回復に向かうとみる意見が多かった。

一方で、物価上昇に対する懸念は依然として大きい。「物価上昇」や「値上がり」といった単語を含むコメント数の回答構成比をみると、依然として「悪くなっている・やや悪くなっている」が過半数

先行き判断DI「新型コロナウイルス」等を含むコメント回答構成比



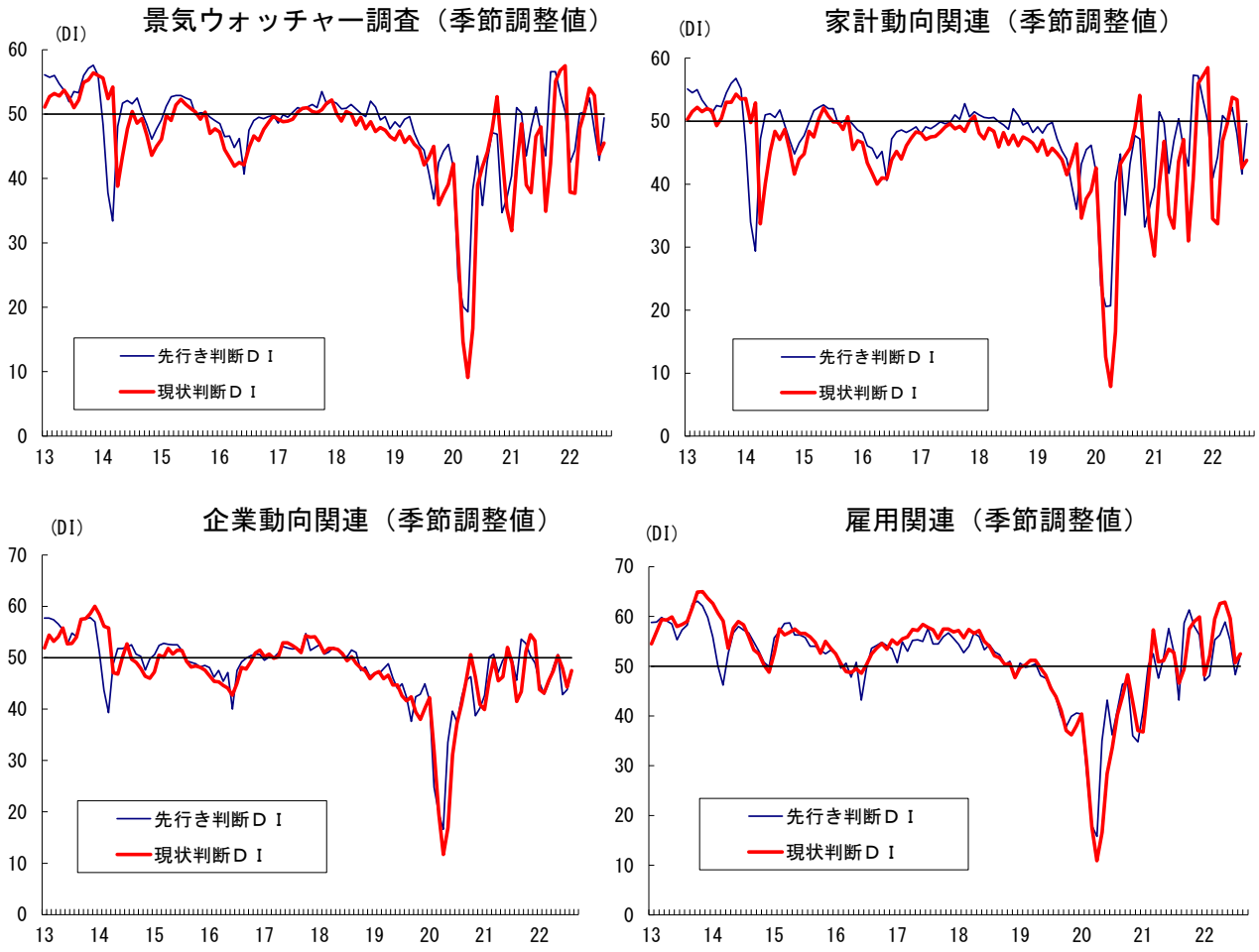
先行き判断DI「価格上昇」等を含むコメント回答構成比



を占める状態が継続している。実際に寄せられたコメントを見ると、「新型コロナウイルスの感染状況は多少落ち着くと思われる一方で、エネルギー価格や食料品価格の高騰等、本格的な景気改善には至らない（百貨店）」といった意見のように、物価上昇の悪影響は今後も継続するとみている意見が多く、景況感回復の頭を押さえていることが窺える。

○先行きは持ち直しに向かうも、回復ペースは緩慢

先行きは、感染拡大の影響が緩和することで、観光や飲食といった対面型サービスを中心に持ち直し傾向が続くだろう。ただし、引き続き物価上昇への懸念が景況感の下押し要因となり、回復ペースは緩慢なものに留まるとみる。ウクライナ情勢の長期化や急速な金融引き締めによる欧米諸国の景気後退懸念など、海外経済の動向は不透明感が強まっており、原材料価格の上昇やサプライチェーンの混乱は今後も継続する公算が大きい。企業のコスト負担が深刻化しており、今後も価格転嫁が進むことで、身の回り品の価格上昇も当面継続しそうな見通しだ。景気ウォッチャー調査でも個人消費の冷え込みに対する懸念が根強く、先行きの景況感は重苦しさが拭えないだろう。



（出所）内閣府「景気ウォッチャー調査」

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。